

中世における経済と宗教

網野 善彦

はじめに

「思想史と社会史の接点」という全体のテーマには必ずしもふさわしくないと考えたが、ここにあえて文字通り「羊頭狗肉」というべき大きなテーマを掲げた理由はいくつかあり、まずその点にふれておきたい。

その一つは、現在の日本史研究の分野では、西欧史に即してキリスト教と経済活動の内的な関係が追求されてきたことや、未開社会について同様の問題をとりあげている経済人類学の動向などがほとんど問題にされず、社会経済史と思想史・宗教史との関係は敗戦後の一時期を除くと、ま

ことに疎遠になっていることに、あらためて気づいたからである。

しかしそうした学問の状況がつづいてきた背景には日本列島の社会そのもののとらえ方の大きな偏り、それを弥生時代以降、専ら農業社会ととらえ、少なくとも江戸前期までは農業こそが社会を規定する生産であり、商工業・金融・流通は副次的な意味しか持たないとする見方が支配的だったような状況のあったことが考えられる。こうした見方から、おのずと宗教は呪術的なそれを含め、稲作、農業との関わりでとらえられ、その社会的基盤についても、農民、農村に専ら目が向けられてきたのであり、例外的に非農業民が問題にされる場合にも、井上鋭夫氏の「ワタリ」

のように、基本的には農業を中心とした共同体からはじき出された人々としてとらえられるにとどまっていたのである。^②

しかしこうした日本社会のとらえ方自体が大きく偏っており、誤りであることはもはや明白と私は考える。近年の縄文時代から中世にいたる考古学の目覚ましい発掘成果、さらに文献史料そのものの読み直しを通じて、日本列島の社会は縄文時代はもとより、弥生時代以降、現在にいたるまで、穀物を生産する狭義の農業はきわめて多様な諸生業の中で、重要ではあるがその一つにとどまり、それが圧倒的な比重を持ったことはただの一度もない、ということができよう。^③

そして十四世紀以降の社会は、都市が列島全域に多数、姿を現わし、そのネットワークによって信用経済が支えられ、社会の機能が維持される著しく都市的な社会であり、^④速水融の指摘するような「経済社会」^⑤といっても決して言い過ぎではない様相を呈している。

それ故、もはやこれを農業に基礎を置いた封建社会と定義するだけでは、到底おさまりがつかないことは明らかであるが、この事実は思想・宗教に即しても、否応なしに新たな問題を提起することになる。そうした点を考え、あえて「経済と宗教」という誇大なテーマを掲げ、いくつか

の思いつきを提出してみたいと思う。

一、商品・貨幣・資本と「宗教」

「商業は人類の歴史とともに古い」といわれるが、最近の考古学の発掘は、日本列島の社会においてもそれが事実であり、縄文時代から交易を前提にした生産―「商品生産」のあったことを証明している。^⑥さらに弥生時代まで視野に入れば、^⑦市庭が立ち、^⑧物品貨幣が流通し、^⑧原初的な金融の行われていたことも間違いないと思われる。

実際、人の生産した物は「市庭」という人の力の及ばない「無縁」の世界、^⑨聖なる神仏の世界に投げ込まれること^⑨によって商品となり、^⑩貨幣は神仏に捧げられた物品、いわば「無縁」の極致とでもいふべき物品であり、^⑩金融の資本もまた神仏・仏物でなくてはならない。^⑪とすると、こうした原初的な商品・貨幣・資本はすべて人の力をこえた神仏の世界、いわば原初的な宗教と結びつくことによって、はじめでそれとして機能している、ということができる。

七世紀末に律令を受容して確立した本格的な国家―「日本国」は当初、基本的に農本主義の立場に立ち、その王権は貨幣を鑄造し、金融―出挙を税制にとりこみ、市庭をその足下に置いて統制し、商業・金融を国制の下に抑えこも

うとしている¹²。しかし、社会の中で実際には生き生きと動いている商業・金融は、そうした国制の下での成員から外れた僧侶・女性によって担われており、やがてこの国家の制度が弛緩した九世紀、十世紀以降、商業、金融、流通は神仏、天皇の直属民の携わるところとなっていく¹³。これはさきにふれた商品、貨幣、資本自体の本質とも関わりがあるが、このような日本国の国制との関連も考えておかななくてはならない。

それ故、十一世紀から十二世紀にかけて、これらの神仏、天皇の直属民は神人、寄人、供御人の称号を公的に認められ、神人・供御人制ともいべき国制が形成されていくが、それは西国諸国にとじまり、東国には及んでいないのである¹⁴。

しかしこのように商工業、金融に関わる職能民が神仏の直属民―神仏の「奴婢」によって担われるというあり方は、西欧との比較では理解し難く、むしろアンデスのヤナコーナやアクリヤ¹⁵、あるいはアフリカの職能民¹⁶などの世界と比べてみる必要がある。そしてこうした形態をとらない東国の職能民のあり方が西欧とも比較しつつ、追求される必要があると思われる。

二、「悪人」に対する抑圧と救済

しかしこうした神人・寄人をはじめ、山僧などの金融・商業に関わる人々の動きを「悪」として糾弾する農本主義的な権力の姿勢は、十二世紀以降、表面化してくる。そこで「悪」といわれているのは、それまでの神仏の権威を背景とした規制のルールをこえて、利息、利潤を追究するような行為、その根底にある従来、経験されたことのないような強烈な欲望そのものであり、実際、商人の利潤追求は「猛悪」といわれたのである¹⁷。

たしかにこの時期以降、そうした得体の知れない力は、さまざまな形で社会を突き動かしていた。「悪左府」「悪源太」などの「悪」はそうした常人をこえる異常な力を示す語であり、限度をこえた殺生、ルールを無視した殺戮も、また「悪」そのものであった。

同様に人を否定なしにその世界にのめりこませる博奕、あるいは「好色」も「悪」とされたのである。

河田光夫がかつて強調したように、穢をキヨめる力、例えば天狗を殺す「穢多のきもきり」も、「悪」と結びつけられ、非人、放免、河原細工丸なども、しばしば「悪僧」「悪徒」「悪党」とよばれたのである。『塵袋』の「イキ物

ヲ殺シウルエタ躰ノ悪人也」もこれと関連してくるが、穢れ自体、人の力の及ばない自然との関わり――誕生、死などの事態に意識され、「発生」するのであり、穢れが悪ととらえられた理由はまさしくそこにあるといつてよからう。¹⁹²⁰

そして実際、十三世紀後半から十四世紀にかけて、海や山の流通路を自立的に管理し、その秩序を保証した人々、商人、金融業者、廻船人、運送業者でもあり、海や山の領主ともいふべき人々、さらに非人とも関わりを持ち、飛礫・撮棒を使い、博奕を好み、「ばさら」な風俗の世界とも深く関わった人々が、「悪党」「海賊」とよばれ、とくに西国で活発な動きを示すようになってきた。²¹

そして山本幸司、保立道久が追究しているように、農本主義の立場に基本的²²に立つこの時期の幕府、王朝は沽酒禁制、沽価法等をふくむ徳政を通じてこの動きを抑制し、「悪」に対するきびしい禁圧を強行したのであり、これに反発する社会の動きとの間に、鋭い緊張関係が生まれたのである。鎌倉末期からいわゆる「南北朝」の動乱にかけての激動の根底には、こうした問題があったと見なくてはならない。

三、鎌倉仏教の二つの流れ

このような社会の根底をゆるがす転換の進行、呪術的な

力とも結びついた神仏の権威の低下に伴い、一方では銭貨の流通のよびおこした新たな欲望の爆発が否応なしにおこり、他方では計算高く、「合理的」な思考と利害に左右される人間関係が出現してくる。こうした状況の中で、兼好が「徒然草」(第二百七段)で描いた「大福長者」は、無限の「所願」「欲」を「悪念」と見て、これを「堅く慎み恐れ」ること、銭を「奴のごとく」用いるのみなく、「君のごとく、神のごとく、恐れ尊みて」用いるべきこと、恥ずかしい目にあつても「怒り恨」まないこと、「正直にして、約を堅くすべ」きことを説き、このことを「守りて利を求めむ人は、富の来ること、火の乾けるに付き、水の下れるに従うがごとくなるべし」と主張している。

ここには、「有徳人」の積極的な生き方、「禁欲」の倫理が模索されているが、こうした否応のない「悪念」に対処し、「悪人」の救済、「悪」の世界の解釈を、宗教の立場から自らの課題としたのが、鎌倉仏教の諸宗派ではなかったか、と私は考える。

そしてそれには、大きく分けて二つの流れがあつたと見てよからう。

一つは、禅宗、律宗、そして浄土宗の一部、あるいは山臥のような人々であり、神仏のために寺社の修造を行い、橋、港湾、道路等を修築する土木事業の推進をめざし、関

所による関料の徴収、棟別銭の賦課を含む勸進によって、神仏への貢献を名目に巨大な資本を蓄積、さらに大船を建造して中国大陸との貿易を行ってそれを肥大化し、非人・河原者を含む多様な職能民を動員、組織して土木建築を推し進める動きである。²⁴⁾

これは「悪」をそれとして認め、むしろ積極的にその動きを組織し、仏のための名目で事業を推進することによって、救済への道をひらこうとしたものと考えることができよう。禅律僧による「非人」の救済事業も、また同じ方向で理解することができると。²⁵⁾

そしてこの流れの中から、各地の莊園・公領の請負人、代官、酒屋・土倉などの金融業者、問丸などの倉庫交通業者、さらに広域的な廻船人などが現れてくる。²⁶⁾ 十四世紀以降、各地の海辺、交通の要衝、市庭等に簇生した都市の住民に、阿弥号を持つ人をはじめ僧形の人、僧名をなめる人、尼などが非常に多いことは注目すべき事実であり、もとよりそのすべてが、この潮流の中の人々とはいえないとしても、経済と宗教の問題を考える上での重要な事実がそこにあることはまちがいないといつてよからう。

そしてもう一つの流れは、時宗、真宗（一向宗、日蓮宗）をあげることができよう。これらの宗派はそれぞれに異なった道をとっているとはいえ、その共通の特質を、「悪人」

そのものの積極的な救済を主張した点に求めることは、さほどの外れではないと思われる。²⁸⁾

また、『時宗過去帳』や『本土寺過去帳』によっても明らかのように、時宗、日蓮宗は明らかに都市、あるいは都市的な場所に教線を伸ばしていた。²⁹⁾ 真宗もまた全く同じであり、これまで真宗を「農民・地侍」の宗教と見たのは「百姓」農民」の思い込みによる誤りといわなくてはならない。³⁰⁾ おのずとこれらの宗派は、都市生活と深くむすびついて穢れのキヨメに携わった、「非人」・河原者とよばれた人々の中にも強い影響を及ぼしていった。³¹⁾

真宗と日蓮宗はそれぞれに教団の組織を持つて世俗的な領主に接近している面もあり、神田千里のいうように、宗教勢力とだけはいえない点もあると思われるが、それらが都市民に支えられていたことは間違いないのではなからうか。³²⁾ ただ、日蓮宗、時宗は東国に比較的強く教勢を張り、真宗は西国に教線を拡げているという地域差が認められ、そこに神人・供御人制の作動している西国と、それがほとんど動いていない東国の差異にまで遡る問題があるのかもしれないが、この点については今後を俟つほかない。

二つの潮流の諸宗派は相互に競合しつつ、十三世紀後半以降、それぞれ活発に動いており、十四世紀から十五世紀にかけては、前者の流れをくむ禅宗、律宗が幕府と結びつ

いて強固な立場を固めたのに対し、後者の潮流のうち、とくに真宗と日蓮宗が、十五世紀から十六世紀にかけて教団の組織を強化して、世俗的な権力と拮抗するにいたったことは、すでによく知られている通りである。

むすび

問題の一つは、これらの鎌倉仏教の諸宗派の教理、さらに教団の組織の中に、商工業、金融等の経済的行為がどのように位置づけられていたかという点であり、少なくとも教団を経済的に支えていくという側面では、祠堂銭や志などのように、前者の潮流も後者の潮流も、それを積極的にとりこんでいくとした点で、同様だったように見える³⁴。ただ、高利を貪ること、度を過ぎた利潤をとる行為を抑制する思想が、果たしてあったのかどうか、思想史の専門家にうかがいたいところである。

それとともに、もう一つの問題は十六世紀末から十七世紀前半にかけての、世俗権力と宗教勢力との激烈な衝突をどのように評価するかにある。神田の指摘するように、このときの宗教勢力、一向一揆の敗北に思想上の本質的な問題を認めない見方も、たしかに成り立ちうるであろうが、ここに建前上、儒教的な農本主義を前面に押し出し、商業・

金融を統制、抑制しようとする世俗権力と、都市民、商工業者等に支えられ、「重商主義」的な志向を持つ宗教勢力の衝突を見ることは可能であり、近世社会を主導した世俗権力のあり方は、やはりこのときの勝利を前提として考えなくてはならない。ときの権力を莊嚴する城郭の絵画に、仏教的な要素が見えるのは織田信長の安土城まで、それ以後は「中国幻想」(チャイニーズ・ロア)が圧倒的になるという大西廣・太田昌子の指摘によってみても、これは認められてよいのではなからうか。

しかしこれらの課題は、私の力をはるかにこえるので、大方の御教示をいただきたいと思う。

註

- (1) 勝俣鎮夫『一揆』岩波新書、一九八二年、同上『戦国時代論』岩波書店、一九九六年、山本幸司『穢と大祓』平凡社、一九九二年などは、こうした動向とも関わる数少ないすぐれた研究である。
- (2) 拙著『日本社会再考』小学館、一九九四年。
- (3) 拙稿『列島の自然と社会』『現代日本文化論9 倫理と道徳』岩波書店、一九九七年。
- (4) 桜井英治『日本中世の経済構造』岩波書店、一九九六年。拙稿『貨幣と資本』『岩波講座 日本通史』第9巻 中世3、岩波書店、一九九四年。
- (5) 速水融『経済社会の成立とその特質—江戸時代社会経

済史への視点」社会経済史学会編『新しい江戸時代像を求めて―その社会経済史的接近』東洋経済新報社、一九八七年。

(6) 例えばこの時代にも基本的な食品であった塩は、交易を前提とした土器製塩によって供給され、黒曜石もまた、特定の場所で採取されて、交易を通じ各地域にひろがったといわれている。

(7) 『魏志』東夷伝倭人の条に「国国市有り、有無を交易」とある点、参照。

(8) 米、絹、布などは、かなり早くから交換手段、価値基準、支払手段となっていたと推定してよからう。

(9) 勝保鎮夫「売買質入れと所有観念」『日本の社会史4 負担と贈与』岩波書店、一九八六年。註(1) 前掲『戦国時代論』に所収。

(10) 註(4) 前掲拙稿及び「境界領域と国家」『日本の社会史2 境界領域と交通』岩波書店、一九八七年。

(11) 出挙の元本が、初尾物、上分物であったことから、それは明らかであり、利息は本来、神仏への礼物と考えることができる。註(4) 前掲拙稿。

(12) 保立道久「中世前期の新制と沽価法」『歴史学研究』六八七号、一九九六年。

(13) 拙稿「中世前期における職能民の存在形態」『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会、一九八八年。

(14) 同右。拙著『中世の非人と遊女』明石書店、一九九四年。

(15) 網野徹哉「アンデスの隷属民―インカ社会のヤナコ―

ナに関する一考察」『月刊百科』三〇六号、三〇九号、一九八八年。

(16) 和崎春日「アフリカの王権と職人集団―バムン族の鑄造技術と職人の集団構成」『歴史と民俗』1、平凡社、一九八六年。

(17) 拙稿「悪」の諸相」『海と列島の中世』日本エディタースクール出版部、一九九二年。

(18) 河田光夫著作集第一巻「親鸞の思想と被差別民」明石書店、一九九五年。

(19) 註(1) 前掲、山本幸司『穢と大赦』。

(20) 拙稿「中世における悪の意味について」『日本中世に何が起きたか』日本エディタースクール出版部、一九九七年。

(21) 拙著『悪党と海賊―日本中世の社会と政治』法政大学出版局、一九九五年。

(22) 山本幸司「中世の法と裁判」『岩波講座 日本通史』第8巻 中世2、岩波書店、一九九四年。

(23) 保立道久「酒と徳政―中世の禁欲主義」『月刊百科』三〇〇号、平凡社、一九八七年。

(24) 松尾剛次「勧進と破戒の中世史―中世仏教の実相」吉川弘文館、一九九五年。

(25) 細川涼一「中世の身分制と非人」『日本エディタースクール出版部、一九九四年』。

(26) 註(4) 前掲、桜井英治『日本中世の経済構造』。

(27) 註(4) 前掲、拙稿「貨幣と資本」。

(28) 真宗については、河田光夫著作集第三巻『親鸞の思想

形成」明石書店、一九九五年。

(29) 註(20) 前掲、拙著『日本中世に何が起きたか』。

(30) 河田光夫著作集第二巻『中世被差別民の装い』明石書店、一九九五年、拙稿「真宗の社会的基盤をめぐって」

『講座 蓮如』第一巻、平凡社、一九九六年。

(31) 註(30) 前掲、河田光夫著作集第二巻。

(32) 神田千里『信長と石山合戦』吉川弘文館、一九九五年。

(33) 神田は「一向宗の伝播者」として、山伏、神人、巫女、念仏僧、平家琵琶法師、地神経琵琶法師、六十六部、旅人、商人をあげているが、これは都市的な性格を持つ人々と見ることができよう、なお、この点は井上鋭夫『一向一揆の研究』吉川弘文館、一九六八年が強調した、真宗を支える「ワタリ」の問題にも通じている。

(34) 金龍静「宗教一揆論」『岩波講座 日本通史』第10巻 中世4、岩波書店、一九九四年にも、蓮如を支えた都市民についての指摘がある。

(35) 註(32) 前掲、神田千里『信長と石山合戦』。

(36) 拙稿「宗教と経済活動の関係」註(20) 前掲『日本中世に何が起きたか』所収。

(37) 大西廣・太田昌子『安土城の中の「天下」』朝日百科歴史を読みなおす4、朝日新聞社、一九九六年。

(神奈川大学特任教授)